ナカザワ・ゴブリン

吾妻 俊海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ナカザワ・ゴブリン

【Ｎコード】
Ｎ９０１７Ｏ

【作者名】
吾妻　俊海

【あらすじ】
この世界に君臨するのはヒューマンなのかゴブリンなのか、それとも…、ヒューマンは森で出逢ったゴブリンに敵意を表すと、応答するようにゴブリンはヒューマンを挑発する。火蓋は切られた。

ナカザワ・ゴブリン　1番（前書き）

携帯で表示するとちょうど1ページ分になるように収めています。

ナカザワ・ゴブリン　1番

少し離れた場所に『みっちゃん』と『サッチャン』がいる。仲がよい友達をあだ名で呼んでいるのではない。みっちゃんは矛を構え持ちサッチャンは背中に背負った剣の柄を握って、暗い森の中で二人は全身から殺気がみなぎるオーラを放っている。そんな二人の頭上をフワフワと、『みっちゃん』『サッチャン』と書かれたかわいらしい名前が浮いているのだ。同じように私の頭上にも『ナカザワ』が浮いている。二人には森の中で出会った。大抵やり過ごすのだが、二人は私を見つけると全身にオーラを放った。仕方ないなと思った私は仁王立ちで対面している。状況は緊迫しているのだ。

みっちゃんは煌びやかな衣を着重ね月夜に美しい女性のシルエットを映し出し、一定の間隔で天を仰ぐと同時に渦のような光が身体を包み一段とオーラが大きくなる。スペルだ。スペルとは呪術の総称でさまざまな効果を発揮する。その隣りで背中に背負っていた盾と剣を抜いたサッチャンはテクノを発動させているようだ。鎧に包まれた筋肉質な身体を包むオーラが青から紫へ、紫から赤へと変化を繰り返している。テクノとは儀式の一種だ、戦いの前の儀式でテンションを上げ、瞬発力や爆発的な力を生み、必殺やクリティカルを誘発する。見たところ、みっちゃん　サッチャンはヒューマンというカテゴリーに属すキャラクターだ。ヒューマンの特徴は職業というシステムによって分類され、その職業を活かす装備や武具が豊富にある。みっちゃんのその出で立ちからしてスペルパワーを最大限に生かせるビショップという職業だろう、それとサッチャンの重厚な装備は接近戦を得意とするソードマンといった所だろうか。

「ヒューマンか、ねんねの時間だろう、この森を去れ」私は叫ぶというトークモードで威嚇した。

すでに日は沈みナイトタイムと言われる時間帯に入っている。ナイトタイムとは要するに夜であってアンデット、スピリットなどの死霊や、デヴィル、バンパイアなどの魔族に属する、要するに魔物と呼ばれるモンスターが元気に徘徊する時間帯なのだが、夜も浅い為まだ見え無い。

ヒューマンは主にデータイム、要するに日中にに活躍するキャラクターだ。このデータイムとナイトタイムではキャラクターのさまざまな要素が変化する。主にスコープ（視界や視距離）、パワーが著しく変化する。データイムに活躍するヒューマンのみっちゃん
サッチャンはナイトタイムに入ると、とても視界が悪く遠くを見ることができない上にパワーも落ちているということになる。しかし殺気がみなぎったオーラを放ったままヒューマンの二人は不敵に微笑んで何も答えなかった。私は腰に挿した2本のアックスを抜き取り微笑み返した。アックスの周りを紫色の妖気が漂い、発動しようとしているスキルに必要な力を溜め込む為に緑色の肉体がはちきれんばかりに緊張している。私はゴブリンだ。

ナカザワ・ゴブリン　1番（後書き）

まだまだ力不足の駄文ですがお許しください。

アドバイスやメッセージ、率直な感想を聞かせていただけるとうれしく思います。

ナカザワ・ゴブリン　2番（前書き）

携帯で表示するとちょうど1ページ分になるように収めています。

ナカザワ・ゴブリン　2番

私はゴブリンだ。ゴブリンはヒューマンと違ってデータイムであろうとナイトタイムであろうと能力的な差は発生しない。そのうえ肉体は強靱で、緑色の皮膚は厚く弾力性と硬質を併せ持っている。そのため軟弱なヒューマンのように重い鎧や衣をまとう必要がない。ゴブリンの特徴を挙げていくと、ゴブリンは森を中心にした生活を送り、緑色の肌と強靱な肉体が生み出す超人的な腕力と脚力で、森の守護族とも呼ばれ森で生活する生物の頂点として君臨している。ゴブリンには特定の生活文化はあるものの、職業という概念は存在せず、肉体的進化の過程によって違いが生じる。巨大化した者はオーガーやトロールと呼ばれ、また集団で行動し小型化して身を守ろうとした者をコボルトと呼び、ゴブリンの劣性遺伝から誕生した者をドワーフと呼んだ。そうした進化の中で原始的遺伝子を継承してきた者こそ誇り高きゴブリンなのだ。

二人のヒューマンは念入りに準備をしている。みっちゃんが腕を振り上げオーラを放つとサッチャンの剣の光りが増していく。所詮お前達は何かに頼らなければ生きる事ができない弱者なのだ、お前達ヒューマンには小細工がよく似合っている。私は姿勢を低く構えながら二人のヒューマンをにらみつけた。
月桂樹の隙間からヒューマンの街を囲う高い城壁が顔を除かせている。テクノのオーラに包まれたサッチャンが待ちきれなくなったのか合図した。
「k？」
「k」
私とみっちゃん　サッチャンとの間には、立派に育った月桂樹が何本も立ち、伸びた枝葉が月明かりを遮り夜の闇を更に深くしていた。月桂樹を縫う様にゆっくりと二人は近づいてくる。私はスペル

の射程に入らないように間合いを保ちながら森の奥へと二人を誘導する。

ここはローリエフォレストと呼ばれる月桂樹の森で、この森で採取される月桂樹の葉や実は、薬、香辛料、食料として我々ゴブリンやヒューマンにとって欠かせない恵みの森だ。以前はヒューマンも森の下級住人であったが、所構わぬ繁殖力で爆発的に人口が増加し、下級弱者が生き残る為に形成した集落や、築いてきた文明の力を頼り勢力を持ち始めた。調子に乗った愚かなヒューマン達は森を我が物とする為に脅威や対立する生命体を排除し始め、我々ゴブリンを森の隅へ追いやった。すると今度は更なる高度な文明の構築の為に森を破壊し、農耕の安定とローリエフォレストの資源を獲得する為に必要の無い森を焼いた。我々ゴブリンの力の及ばない森は消え、ローリエフォレストへ続く必要のない森は切り開かれ拠点となる町が造られた。

互いの呼吸を計りながら足取りは徐々に早くなっていく、おろかな話だ。お前達は『この世界』の中で自分達がどのような存在なのか、解らないのだ。私は渾身の力で吠え、戦いの時を告げた。いいか、俺が教えてやる。踏締めた大地は引き締まり、森はざわめき、遠くに見えていた城壁は闇夜に消えていた。

ナカザワ・ゴブリン　2番（後書き）

まだまだ力不足の駄文ですがお許しください。

アドバイスやメッセージ、率直な感想を聞かせていただけるとうれしく思います。

ナカザワ・ゴブリン　3番（前書き）

携帯で表示するとちょうど1ページ分になるように収めています。

3話目は戦闘がメインです。苦手な方はご遠慮ください。

ナカザワ・ゴブリン　3番

森がポカリと口を開けたような広場に出た、月明りを遮るものがない、視界の狭いヒューマンにとってはチャンスだった。みっちゃんが突如、私との間を詰めスペルを発動した。鎖の光が身体を包む、チェーンだ。間合いを取り直そうとして走り始めたが身体が痺れ足がもつれた。効果が甘く完全に動きを封じられることはなかったが、足がもつれバランスを失い地面に膝まずいた。チャンスとばかりにサッチャンが隠し持っていたスティングを投げ、膝まずいている私の右腕をかすめ、緑色の腕を裂き、その裂かれた傷口からは紫色の液体が溢れた。しかし私は止まることなく膝まずいた反動を利用し、傷口をかばいながら地面を転がり、目の前にあった身体が隠れる大きさの岩の影に飛び込んで二発目のスティングが岩に弾けた。

私は岩の背にもたれチッと舌打ちをした。不覚を取った。駆けてくる足音で距離を測りながら奥に見える雑木の茂みに身を隠す事に決めた。私は二人を少し甘く見ていたようだ。特にスティングは想定外だった。このままではスペルの射程距離を抜けることができない。チェーンの効果が完全に決まれば確実にスティングの餌食になってしまう、足音が迫ってくる、もたついている時ではない。もたれていた岩を蹴り、その奥にある月桂樹の影に右腕をかばって身体を転ばした時、再び鎖の光が身体を包み強い痺れが走って、私は勢い良く地面に仰向けになって倒れた。

幸い月桂樹の陰で暗く、二人は慎重で自分達の最善の距離を保ち必要以上には近づいてこない、私はまだ効果の切れていない不自由な身体をなんとか起こして雑木の茂みの中へ潜りこんだその時、狙い済ました三発目のスティングの風を切る音が聞こえ咄嗟に胸をアックスでかばった。スティングはアックスに当たり鈍い金属音が響

いた。その金属音の不快で鈍い音は不協和音として森へ響き渡り静粛な森の眠りを覚まし、同時に少し強い風が吹き、月桂樹が、雑木の茂みが、菜の花の群が、ススキの原が、リンドウの花が、風と不協和音と共に揺れ、森がざわめき一斉に二人のヒューマンに振り返った、ように感じた。

弾いたスティングをとっさに拾い雑木の陰から二人を睨んだ時、みっちゃんは走りながら矛を回し三度目のチェーンを発動したが失敗し二人は立ち止まった。身体の痺れが切れていく。森が二人を意識し、二人が森の様子を伺っている。私はここぞとばかりに同化というスキルを発動し闇に溶けた。サッチャンは森の様子を伺いながら四発目のスティングを放ったが、スティングは雑木の茂みを抜け、月桂樹に突き刺さりドスッと鈍く太い音が振動となって月桂樹を揺すった。月桂樹に止まっていたフクロウの光る目がヒューマンの二人をうつろに眺め、コウモリの群れが一斉に飛び立った。遠くでは地鳴りにも似たオーガーの声が聞こえ、ドワーフがコウモリの群れが舞う空を振り返り、コボルトの群れが月桂樹の陰から現れた。

ナカザワ・ゴブリン　3番（後書き）

まだまだ力不足の駄文ですがお許しください。

アドバイス、メッセージ、率直な感想を聞かせていただけるとうれしく思います。

ナカザワ・ゴブリン　４番（前書き）

携帯で表示するとちょうど１ページ分になるように収めています。

ナカザワ・ゴブリン　４番

コボルトの群れがミャーミャーとヒューマンに罵声を浴びせ、駆けてきたドワーフが斧を振りかざしてヒューマンに向かっていく、サッチャンはドワーフなど物ともせず叩き切ると、それを見た月桂樹より背が高いオーガーが月桂樹を掻き分け、激情したように雄叫びを上げて斧を振り上げた。倒れたドワーフをかばう様に囲んだコボルトの群れはさらに大きな罵声を浴びせながら石や岩をヒューマン達に投げつけ、みっちゃんがそんなコボルトの群れをドワーフ共々スペルで焼き尽くしていく、オーガーの斧はサッチャンの盾に弾き返され、反動で後退し怯んだオーガーのわき腹をサッチャンのソードが深く刺し抜いた。オーガーは一段と大きな悲鳴にも似た甲高い雄叫びを挙げ倒れた。

オーガーの雄叫び、コボルトの悲鳴、鈍い金属音、これらは全て森にとって不協和音だ、森のシンパシーはついにその不協和音に対し攻撃を開始した。森を侵略する者がいる。シンパシーはそう告げたのだ。森を侵略す者がいる。そうか、侵略する者がいるのだな。脅かす者がいるのだな。乱す者がいるのだな。吼える者がいるのだな。叫ぶ者がいるのだな。それは言葉ではなく目と目と目と目が振り向くように、雄叫びや悲鳴が月桂樹の葉を震わせ雑木の茂みへ伝わり、雑木の茂みはざわめきながら辺り一面に広がるススキの原に告げ、ススキは一斉に花粉を飛ばし、花粉は月の光を浴びてススキの原を金色に輝かせ、リンドウの花が不思議な臭いを放った。シンパシーが森中へ波紋のように静かに拡がり続けた。

どこからかグノームが現れた、グノームはゴブリンとは種族が違う、キノコほどの背丈しかない、グノームは花の上をジャンプしながら、菜の花の葉を滑り落ちながら、傷ついたオーガーやドワーフ

へ近づいていく、通称森の小人とよばれ、その小ささゆえに戦闘は好まないが、保身の為に身を守る魔法を使う事ができる。グノームの両手が緑色のやさしい光を放つ、その光はオーガーを囲むように徐々に増えていく、まるで蛍の群れがオーガーを包んでいるようだ、切りが無いな。みっちゃんがつぶやいた。サッチャンは頷きながら再び立ち上がろうとしたオーガーに止めを刺そうとした時、いくつもの風を切る音がし、気を取られた隙にオーガーに殴り飛ばされた。

エルフだ。みっちゃんがそう叫んだ時、蛍のような光が一斉に消えた。月はいつの間にか雲に隠れていた。闇だった。ヒューマンは一瞬にして視界を奪われたのだ。チッと誰かが舌打ちをしてそれが最後の言葉になった。風を裂く音と同時に、突き刺さったり、抉られたり、突き抜けたりする鈍い音と、弾き返すような金属音が響く、風を裂く音は増え続け、鈍い音は次第にピチャピチャと何かをこねる様な音へ変わり、風が止んだ。静まり返った闇にグノームは一斉にやさしい光を放った。そこにはおびただしい肉の塊と真っ赤に染まった月桂樹が立っていた。

ナカザワ・ゴブリン　４番（後書き）

まだまだ力不足の駄文ですがお許しください。

アドバイス、メッセージ、率直な感想を聞かせていただけるとうれしく思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9017o/

ナカザワ・ゴブリン

2011年10月6日04時10分発行